

**(3) 90日間亜急性毒性試験 (マウス)**

ICR マウス (一群雌雄各 10 匹) を用いた混餌 (原体: 0、3、10、30、100、300、1,000、3,000 及び 10,000 ppm) 投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。各投与群に認められた毒性所見は表 16 に示されている。

本試験において、3,000 ppm 以上投与群の雌及び 1,000 ppm 以上投与群の雄で肝絶対及び比重量増加、肝細胞壊死等が認められたので、無毒性量は雄で 300 ppm (42.7 mg/kg 体重/日)、雌で 1,000 ppm (232 mg/kg 体重/日) であると考えられた。(参照 3、4、7)

表 16 90 日間亜急性毒性試験 (マウス) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
10,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 摂餌量減少</li> <li>・ WBC、Lym、Ht、MCV、MCH 減少、Seg、MCHC 増加</li> <li>・ AST、ALP、BUN、GGT 増加、Glu 減少</li> <li>・ 胆管増生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体重増加抑制、摂餌量減少</li> <li>・ Hb、Ht、MCV、MCH 減少、PLT、MCHC 増加</li> <li>・ ALT、AST、ALP、BUN、GGT 増加</li> <li>・ 胆管増生</li> <li>・ 腎マクロファージ色素沈着</li> </ul>
3,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体重増加抑制</li> <li>・ ALT 増加</li> <li>・ 肝肥大 (肝小葉構造明瞭化を伴う)</li> <li>・ 肝クッパー細胞色素沈着</li> <li>・ 脾色素沈着</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ T.Chol、Glu 減少</li> <li>・ 肝絶対及び比重量増加</li> <li>・ 肝肥大 (肝小葉構造明瞭化を伴う)</li> <li>・ 肝絶対及び比重量増加</li> <li>・ 肝細胞肥大</li> <li>・ 肝細胞空胞化</li> <li>・ 肝細胞壊死</li> <li>・ 肝小葉中心性壊死性肝炎</li> <li>・ 肝クッパー細胞色素沈着</li> <li>・ 副腎束状帯細胞好酸性化/肥大</li> </ul>
1,000 ppm 以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ T.Chol 減少</li> <li>・ 肝絶対及び比重量増加</li> <li>・ 肝細胞肥大</li> <li>・ 肝細胞空胞化</li> <li>・ 肝細胞壊死</li> <li>・ 肝小葉中心性壊死性肝炎</li> <li>・ 副腎束状帯細胞好酸性化/肥大</li> </ul>	1,000 ppm 以下毒性所見なし
300 ppm 以下	毒性所見なし	

**(4) 90日間亜急性毒性試験 (イヌ)**

ビーグル犬 (一群雌雄各 4 匹) を用いた混餌 (原体: 0、10、200、800 及び 1,600 ppm) 投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施された。

各投与群に認められた毒性所見は表 17 に示されている。

本試験において、200 ppm 以上投与群の雄で肝細胞肥大が、800 ppm 以上投与群の雌で ALP 増加及び肝細胞肥大が認められたので、無毒性量は雄で 10 ppm (0.34

mg/kg 体重/日)、雌で 200 ppm (7.88 mg/kg 体重/日) であると考えられた。(参照 3、4)

表 17 90 日間亜急性毒性試験 (イヌ) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
1,600 ppm	・体重増加抑制、摂餌量減少	・体重増加抑制、摂餌量減少 ・肝絶対及び比重量増加
800 ppm 以上	・ALP 増加 ・肝絶対及び比重量増加	・ALP 増加 ・肝細胞肥大 (小葉中心性及び小葉中間帯)
200 ppm 以上	・肝細胞肥大 (小葉中心性及び小葉中間帯)	200 ppm 以下毒性所見なし
10 ppm	毒性所見なし	

## 1 1. 慢性毒性試験及び発がん性試験

### (1) 1 年間慢性毒性試験 (イヌ)

ビーグル犬 (一群雌雄各 6 匹) を用いた混餌 (原体 : 0、10、100、400 及び 1,600 ppm) 投与による 1 年間慢性毒性試験が実施された。

各投与群に認められた毒性所見は表 18 に示されている。

死亡例は認められなかった。

本試験において、400 ppm 以上投与群の雌雄で肝細胞肥大等が認められたので、無毒性量は雌雄とも 100 ppm (雄 : 3.09 mg/kg 体重/日、雌 : 3.83 mg/kg 体重/日) であると考えられた。(参照 3、4)

表 18 1 年間慢性毒性試験 (イヌ) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
1,600 ppm	・体重増加抑制、摂餌量減少 ・RBC 減少、PLT 増加 ・ALT、ALP、無機リン増加、Alb 減少 ・肝絶対及び比重量増加 ・肝肥大 ・肝小葉構造明瞭化	・体重増加抑制、摂餌量減少 ・Alb 減少、GGT、無機リン増加 ・肝肥大 ・肝小葉構造明瞭化
400 ppm 以上	・肝細胞肥大 (小葉中心性、び漫性)	・ALP 増加 ・肝絶対及び比重量増加 ・肝細胞肥大 (小葉中心性、び漫性)
100 ppm 以下	毒性所見なし	毒性所見なし

### (2) 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験 (ラット)

SD ラット (一群雌雄各 110 匹) を用いた混餌 (原体 : 0、50、200 及び 800 ppm) 投与による 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験が実施された。

各投与群に認められた毒性所見は表 19 に示されている。対照群と投与群で死亡

率に差は認められなかった。

検体投与に関連して発生頻度が増加した腫瘍性病変はなかった。

本試験において、200 ppm 以上投与群の雄で精巣絶対重量減少等が、800 ppm 投与群の雌で肝絶対及び比重量増加等が認められたので、無毒性量は雄で 50 ppm (2.49 mg/kg 体重/日)、雌で 200 ppm (12.9 mg/kg 体重/日) であると考えられた。発がん性は認められなかった。(参照 3、4)

表 19 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験 (ラット) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
800 ppm	・体重増加抑制、摂餌量減少	・体重増加抑制 ・肝絶対及び比重量増加
200 ppm 以上	・精巣絶対重量減少 ・精巣萎縮	200 ppm 以下毒性所見なし
50 ppm	毒性所見なし	

### (3) 2 年間発がん性試験 (ラット)

SD ラット (一群雌雄各 60 匹) を用いた混餌 (0 及び 2,500 ppm) 投与による 2 年間発がん性試験が実施された。

対照群と投与群で死亡率に差は認められなかった。

投与群の雌雄で体重増加抑制、肝細胞肥大 (小葉中心性、小葉中間帯)、肝細胞空胞化が、雄で有核赤血球減少、肝絶対及び比重量増加、精巣絶対重量減少及び精巣精子無形成が、雌で Neu 減少、Lym 増加、肝比重量増加が認められた。

検体投与に関連して発生頻度が増加した腫瘍性病変はなかった。

本試験において、2,500 ppm 投与群の雌雄で腫瘍性病変の発生頻度の増加が認められなかったため、2,500 ppm 以下 (雄: 106 mg/kg 体重/日、雌: 136 mg/kg 体重/日以下) でミクロブタニルはラットに対し発がん性を示さないと考えられた。(参照 3)

### (4) 2 年間発がん性試験 (マウス)

ICR マウス (一群雌雄各 110 匹) を用いた混餌 (0、20、100 及び 500 ppm) 投与による 2 年間発がん性試験が実施された。

対照群と投与群で死亡率に差は認められなかった。

500 ppm 投与群の雌雄で肝絶対及び比重量増加、限局性肝細胞変質及び多巢性肝細胞空胞化が、同群の雄で小葉中心性肝細胞肥大、門脈周辺性点状空胞化、肝クッパー細胞色素沈着、肝細胞壊死が、同群の雌で ALT 増加が認められた。

検体投与に関連して発生頻度が増加した腫瘍性病変はなかった。

本試験における無毒性量は、雌雄とも 100 ppm (雄: 13.7 mg/kg 体重/日、雌: 16.5 mg/kg 体重/日) であると考えられた。発がん性は認められなかった。(参照 3、7)

## (5) 18か月間発がん性試験 (マウス)

ICR マウス (一群雌 60 匹) を用いた混餌 (0 及び 2,000 ppm) 投与による 18 か月間発がん性試験が実施された。

対照群と投与群で死亡率に差は認められなかった。

投与群で体重増加抑制、摂餌量減少、肝絶対及び比重量増加、肝細胞肥大、肝細胞空胞化、肝クッパー細胞及びマクローファージへの色素沈着、肝単細胞壊死、副腎皮質束状帯肥大が認められた。検体投与に関連して発生頻度が増加した腫瘍性病変はなかった。

本試験において、2,000 ppm 投与群で腫瘍性病変の発生頻度の増加が認められなかったため、2,000 ppm 以下 (394 mg/kg 体重/日以下) でミクロブタニルはマウスに対し発がん性を示さないと考えられた。(参照 3)

## 12. 生殖発生毒性試験

### (1) 2世代繁殖試験 (ラット)

SD ラット (一群雌雄各 25 匹) を用いた混餌 (原体: 0、50、200 及び 1,000 ppm) 投与による 2 世代繁殖試験が実施された。

親動物及び児動物における各投与群で認められた毒性所見は表 20 に示されている。

親動物では、1,000 ppm 投与群の雌 (P、F<sub>1</sub>) で小葉中心性肝細胞肥大等が、200 ppm 以上投与群の雄で肝絶対重量増加 (P)、小葉中心性肝細胞肥大等 (F<sub>1</sub>) が認められた。

児動物では 1,000 ppm 投与群 (F<sub>1</sub>、F<sub>2</sub>) で有意差はないものの哺育期間中の体重増加抑制が、1,000 ppm (F<sub>2</sub>) あるいは 200 ppm 以上 (F<sub>1</sub>) 投与群で死産児数増加等が認められた。

本試験において、親動物では 200 ppm 以上投与群の雄で肝絶対重量増加等が、1,000 ppm 以上投与群の雌で小葉中心性肝細胞肥大等が、児動物では 200 ppm 以上投与群で死産児数増加等が認められたので、無毒性量は親動物では雄で 50 ppm (P 雄: 3.67 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雄: 3.64 mg/kg 体重/日)、雌で 200 ppm (P 雌: 17.2 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雌: 17.5 mg/kg 体重/日)、児動物では雌雄とも 50 ppm (P 雄: 3.67 mg/kg 体重/日、P 雌: 4.42 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雄: 3.64 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雌: 4.17 mg/kg 体重/日) であると考えられた。

1,000 ppm 投与群で妊娠率減少が認められ、200 ppm 以上で出産率の減少が認められたので、繁殖能に対する無毒性量は雌雄とも 50 ppm (P 雄: 3.67 mg/kg 体重/日、P 雌: 4.42 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雄: 3.64 mg/kg 体重/日、F<sub>1</sub> 雌: 4.17 mg/kg 体重/日) であると考えられた。(参照 3)

表 20 2 世代繁殖試験（ラット）で認められた毒性所見

	投与群	親 P、児 : F <sub>1</sub>		親 : F <sub>1</sub> 、児 : F <sub>2</sub>	
		雄	雌	雄	雌
親動物	1,000 ppm	・摂餌量減少 ・小葉中心性肝細胞肥大	・摂餌量減少 ・小葉中心性肝細胞肥大 ・肝絶対重量増加	・体重増加抑制 ・弛緩性精巣 ・精巣萎縮	・小葉中心性肝細胞肥大 ・肝絶対重量増加
	200 ppm 以上	・肝絶対重量増加	200 ppm 以下 毒性所見なし	・小葉中心性肝細胞肥大 ・肝絶対重量増加	200 ppm 以下 毒性所見なし
	50 ppm	毒性所見なし		毒性所見なし	
児動物	1,000 ppm	[・体重増加抑制]		[・体重増加抑制] ・死産児数増加 ・平均同腹児数減少	
	200 ppm 以上	・死産児数増加		200 ppm 以下毒性所見なし	
	50 ppm	毒性所見なし			

注) []は統計学的有意差なし

### (2) 発生毒性試験（ラット）

SD ラット（一群雌 25 匹）の妊娠 6～15 日に強制経口（原体：0、31.3、93.8、313 及び 469 mg/kg 体重/日、溶媒：コーン油）投与し、発生毒性試験が実施された。

母動物では 469 mg/kg 体重/日投与群で口及び膺からの赤色浸出物、糞便量の減少、泌尿生殖器周辺の汚れが、313 mg/kg 体重/日以上投与群で被毛粗剛、落屑、流涎が認められた。

胎児では 313 mg/kg 体重/日以上投与群で第 7 頸肋骨及び第 14 痕跡肋骨の増加が、93.8 mg/kg 体重/日以上投与群で胎児死亡率の上昇が認められた。

本試験における無毒性量は、母動物で 93.8 mg/kg 体重/日、胎児で 31.3 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 3、5、7）

### (3) 発生毒性試験（ウサギ）

NZW ウサギ（一群雌 6 匹）の妊娠 7～19 日に強制経口（原体：0、20、60 及び 200 mg/kg 体重/日、溶媒：1%MC 水溶液）投与し、発生毒性試験が実施された。

母動物では、200 mg/kg 体重/日投与群で糞便の異常、血尿、泌尿生殖器周辺の血液付着及び流産が、60 mg/kg 体重/日以上投与群で体重増加抑制が認められた。

胎児では、200 mg/kg 体重/日投与群で生存胎児数及び胎児生存率の減少が認められ、有意差はないものの低体重が認められた。

本試験における無毒性量は、母動物で 20 mg/kg 体重/日、胎児で 60 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。（参照 3、4）

### 1.3. 遺伝毒性試験

ミクロブタニルの細菌を用いた DNA 修復試験及び復帰突然変異試験、チャイニーズハムスター卵巣由来培養細胞 (CHO) を用いた HGPRT 遺伝子突然変異試験及び染色体異常試験、ラット肝細胞を用いた不定期 DNA 合成 (UDS) 試験、マウスを用いた *in vivo* 染色体異常試験、ラットを用いた優性致死試験が実施された。

結果は表 21 に示されており、すべて陰性であったことから、ミクロブタニルに遺伝毒性はないものと考えられた。(参照 3、4、7)

表 21 遺伝毒性試験概要 (原体)

試験	対象	処理濃度・投与量	結果
<i>in vitro</i>	DNA 修復試験	<i>Bacillus subtilis</i> (H17, M45 株) 313~5,000 µg/7 <sup>°</sup> イク (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異試験	<i>Salmonella typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537 株) 75~7,500 µg/7 <sup>°</sup> レト (+/-S9)	陰性
		<i>S. typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537 株) <i>Escherichia coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株) 125~2,000 µg/7 <sup>°</sup> レト (+/-S9)	陰性
	遺伝子突然変異試験 ( <i>Hgprt</i> 遺伝子)	チャイニーズハムスター卵巣由来細胞 (CHO-K1-BH4) ①25~100 µg/mL (-S9) ②60~90 µg/mL (-S9) ③120~160 µg/mL (+S9) ④120~150 µg/mL (+S9) ⑤165~170 µg/mL (+S9) ⑥160 µg/mL (+S9)	陰性
	染色体異常試験	チャイニーズハムスター卵巣由来細胞 (CHO) ①25~75 µg/mL (-S9) ②20~50 µg/mL (+S9)	陰性
	UDS 試験	ラット肝初代培養細胞 0.1~1,000 µg/mL	陰性
<i>in vivo</i>	染色体異常試験	ICR マウス (骨髄細胞) (一群雄 10 匹) ①単回経口投与 802 mg/kg 体重 (投与 6、24 及び 48 時間後と殺) ②1 日 1 回、5 日間経口投与 802 mg/kg 体重/日 (最終投与 6 時間後と殺)	陰性
		ICR マウス (骨髄細胞) (一群雌雄各 5 匹) 単回経口投与 1,280 mg/kg 体重 (投与 6、27 及び 51 時間後と殺)	陰性
	優性致死試験	SD ラット (一群雄 25 匹、雌 50 匹) 単回経口投与 10、100、735 mg/kg 体重	陰性

注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

代謝物 M3、M4、M12 及び M13 の細菌を用いた DNA 修復試験及び復帰突然変異試験が実施された。

結果は表 22 に示されている。試験結果はすべて陰性であり、遺伝毒性はないものと考えられた。(参照 3)

表 22 遺伝毒性試験概要 (代謝物)

試験	対象	処理濃度	結果	
代謝物 M3	DNA 修復試験	<i>B. subtilis</i> (H17, M45 株)	200~10,000 $\mu\text{g}/\bar{\tau}^{\circ}$ イスク (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異 試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537 株) <i>E. coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	156~5,000 $\mu\text{g}/\bar{\tau}^{\circ}$ V-ト (+/-S9)	陰性
代謝物 M4	DNA 修復試験	<i>B. subtilis</i> (H17, M45 株)	100~5,000 $\mu\text{g}/\bar{\tau}^{\circ}$ イスク (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異 試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537 株) <i>E. coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	313~5,000 $\mu\text{g}/\bar{\tau}^{\circ}$ V-ト (+/-S9)	陰性
代謝物 M12	DNA 修復試験	<i>E. coli</i> (Pol A <sup>+</sup> , Pol A <sup>-</sup> 株)	62.5~1,000 $\mu\text{g}/\bar{\tau}^{\circ}$ イスク (+/-S9)	陰性
	復帰突然変異 試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537, TA1538 株)	20~12,500 $\mu\text{g}/\bar{\tau}^{\circ}$ V-ト (+/-S9)	陰性
代謝物 M13	復帰突然変異 試験	<i>S. typhimurium</i> (TA98, TA100, TA1535, TA1537 株)	20~5,120 $\mu\text{g}/\bar{\tau}^{\circ}$ V-ト (+/-S9)	陰性

注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

### Ⅲ. 食品健康影響評価

参照に挙げた資料を用いて、農薬「マイクロブタニル」の食品健康影響評価を実施した。また、今回ミニトマトの作物残留試験が新たに提出された。

$^{14}\text{C}$  で標識したマイクロブタニルの動物体内運命試験の結果、マイクロブタニルは投与1時間以内で  $C_{\text{max}}$  に達し、投与後 96 時間で約 80%TAR 以上排泄された。排泄経路は糞中及び尿中で同程度であった。体内では肝臓、腎臓への分布が多かった。排泄物中の親化合物は 10%TRR 未満であり、主要代謝物として M7 が存在した。

$^{14}\text{C}$  で標識したマイクロブタニルの植物体内運命試験の結果、主要成分は親化合物であり、主要な代謝物として M4、M8、M9、M12、M13 等が存在したが、試験に用いた標識体によって存在量が異なった。

マイクロブタニル及び代謝物 (M3、M4、M8 及び M9 の合計) を分析対象化合物として作物残留試験が実施された。マイクロブタニル及び代謝物の最大残留値は、いずれも最終散布 14 日後に収穫した茶 (荒茶) の 9.57 及び 1.95 mg/kg (親化合物換算で 1.85 mg/kg) であった。

各種毒性試験結果から、マイクロブタニル投与による主な影響は肝臓 (絶対及び比重量増加等) 及び長期投与における精巢 (ラットの絶対重量減少等) に観察された。発がん性及び遺伝毒性は認められなかった。

発生毒性試験においてラットでは骨格変異の増加が認められたが、奇形の増加は認められず、ウサギにおいては奇形及び変異の増加は認められなかった。これらのことから、マイクロブタニルに催奇形性はないと考えられた。

各種試験結果から、農産物中の暴露評価対象物質をマイクロブタニル (親化合物のみ) と設定した。

各試験の無毒性量等は表 23 に示されている。

各試験で得られた無毒性量のうち最小値は、イヌを用いた 90 日間亜急性毒性試験の 0.34 mg/kg 体重/日であったが、より長期の試験である 1 年間慢性毒性試験の無毒性量は 3.09 mg/kg 体重/日であった。この差は用量設定の違いによると考えられ、90 日間亜急性毒性試験の最小毒性量が 7.26 mg/kg 体重/日であることから判断しても、イヌにおける無毒性量を 3.09 mg/kg 体重/日としても安全性は担保されるものと考えられた。

食品安全委員会は、各試験で得られた無毒性量のうち最小値はラットを用いた 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験の 2.49 mg/kg 体重/日であると考え、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.024 mg/kg 体重/日を一日摂取許容量 (ADI) と設定した。

ADI	0.024 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料)	慢性毒性/発がん性併合試験
(動物種)	ラット
(期間)	2 年間
(投与方法)	混餌



(無毒性量)	2.49 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

暴露量については、当評価結果を踏まえて暫定基準値の見直しを行う際に確認することとする。

表 23 各試験における無毒性量等の比較

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) 1)				参考資料 (農薬抄録)
			JMPR	米国	カナダ	食品安全委員会	
ラット	90日間 亜急性 毒性試験 ①	0、100、300、3,000 ppm 雄：0、6.2、18.8、192 雌：0、6.9、19.6、225	雄：18.8 雌：19.6 雌雄：体重増加抑制等			雄：18.8 雌：19.6 雌雄：体重増加抑制等	雄：18.8 雌：19.6 雌雄：体重増加抑制等
	90日間 亜急性 毒性試験 ②	0、10、30、100、300、 1,000、3,000、 10,000、30,000 ppm 雄：0、0.52、1.60、 5.22、15.3、51.5、 158、585、1,730 雌：0、0.67、2.03、 6.85、19.7、65.8、 195、665、1,810	雄：5.22 雌：19.7 雌雄：肝 MFO 活性上昇		雄：4.9 雌：18.5 (mg ai/kg 体重/日) 雌雄：肝 MFO 活性上昇	雄：51.5 雌：65.8 雌雄：肝絶対及び比重量 増加等	雄：51.5 雌：65.8 雌雄：肝絶対及び比重量 増加等
	2年間 慢性毒性/ 発がん性 併合試験	0、50、200、800 ppm 雄：0、2.49、9.84、 39.2 雌：0、3.23、12.9、 52.3	雄：2.5 雌：12.9 雄：精巣絶対重量減少等 雌：体重増加抑制等 (発がん性は認められ ない)	雌雄：2.49 雌雄：精巣萎縮及び重 量減少	雄：2.5 雌：52 (mg ai/kg 体重/日) 雄：精巣絶対重量減少等 雌：毒性所見なし (発がん性は認められ ない)	雄：2.49 雌：12.9 雄：精巣絶対重量減少等 雌：肝絶対及び比重量増 加等 (発がん性は認められ ない)	雄：2.49 雌：12.9 雄：精巣絶対重量減少等 雌：肝絶対及び比重量増 加等 (発がん性は認められ ない)
	2世代 繁殖試験	0、50、200、1,000 ppm	親動物 雄：3.6	雌雄：10	親動物： 雄：3.7	親動物 P 雄：3.67 F1 雄：3.64	親動物 P 雄：3.67 F1 雄：3.64

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) 1)				
			JMPR	米国	カナダ	食品安全委員会	参考資料 (農薬抄録)
		P 雄：0、3.67、14.3、70.7 P 雌：0、4.42、17.2、85.9 F <sub>1</sub> 雄：0、3.64、15.1、76.4 F <sub>1</sub> 雌：0、4.17、17.5、88.0	雌：17.4  繁殖能 雄：3.6 雌：4.3  親動物 雄：肝重量増加 雌：体重増加抑制等  繁殖能 出産率及び平均同腹児数減少、死産率増加	雌雄：精巣萎縮、死産数増加等	雌：15  繁殖能：15  親動物 雄：肝絶対重量増加等 雌：小葉中心性肝細胞肥大  繁殖能：妊娠率及び出産率低下	P 雌：17.2 F <sub>1</sub> 雌：17.5  児童物及び繁殖能 P 雄：3.67 F <sub>1</sub> 雄：3.64 P 雌：4.42 F <sub>1</sub> 雌：4.17  親動物 雄：肝絶対重量増加等 雌：小葉中心性肝細胞肥大等  児童物：死産児数増加等 繁殖能：出産率減少	P 雌：17.2 F <sub>1</sub> 雌：17.5  児童物及び繁殖能 P 雄：3.67 F <sub>1</sub> 雄：3.64 P 雌：4.42 F <sub>1</sub> 雌：4.17  親動物 雄：肝絶対重量増加等 雌：小葉中心性肝細胞肥大等  児童物：死産児数増加等 繁殖能：出産率低下
	発生毒性試験	0、31.3、93.8、313、469	母動物：94 胎児：31  母動物：粗毛、落屑及び流涎 胎児：腹あたり吸収胚数増加等 (催奇形性は認められない)	60  吸収胚数増加、平均産児数減少	母動物：94 胎児：31  母動物：粗毛、落屑及び流涎 胎児：腹あたり吸収胚数増加等 (催奇形性は認められない)	母動物：93.8 胎児：31.3  母動物：被毛粗剛、落屑、流涎等 児童物：胎児死亡率の上昇	母動物：93.8 胎児：31.3  母動物：口及び膺からの赤色浸出物等 児童物：胎児死亡率の上昇
マウス	90日間 亜急性 毒性試験	0、3、10、30、100、300、1,000、3,000、10,000 ppm 雄：0、0.40、1.54、4.79、	雄：42.7 雌：65.5  雌雄：肝病理組織学的所見、肝重量増加等		雌雄：44  雌雄：肝病理組織学的所見、肝重量増加等	雄：42.7 雌：232  雌雄：肝絶対及び比重量増加、肝細胞壊死等	雄：42.7 雌：232  雌雄：肝絶対及び比重量増加、肝細胞壊死等

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) <sup>1)</sup>				
			JMPR	米国	カナダ	食品安全委員会	参考資料 (農薬抄録)
		14.1、42.7、132、 542、2,040 雌：0、0.62、2.11、 6.94、22.9、65.5、 232、710、2,030					
	2年間 発がん性 試験	0、20、100、500 ppm 雄：0、2.7、13.7、70.2 雌：0、3.2、16.5、85.2	雄：2.7 雌：3.2 雌雄：肝MFO活性上昇 (発がん性は認められ ない)		雄：13.7 雌：16.5 雌雄：肝重量増加等 (発がん性は認められ ない)	雄：13.7 雌：16.5 雌雄：肝絶対及び比重量 増加等 (発がん性は認められ ない)	雄：13.7 雌：16.5 雌雄：肝絶対及び比重量 増加等 (発がん性は認められ ない)
ウサギ	発生毒性 試験	0、20、60、200	母動物：20 胎児：60 母動物：体重増加抑制 胎児：胚吸収率の増加等 (催奇形性は認められ ない)		母動物及び胎児：60 母動物：体重増加抑制等 胎児：胚吸収率増加、低 体重 (催奇形性は認められ ない)	母動物：20 胎児：60 母動物：体重増加抑制 胎児：低体重(有意差な し) (催奇形性は認められ ない)	母動物：20 胎児：60 母動物：体重増加抑制 胎児：低体重(有意差な し) (催奇形性は認められ ない)
イヌ	90日間 亜急性 毒性試験	0、10、200、800、 1,600 ppm 雄：0、0.34、7.26、 29.1、56.8 雌：0、0.42、7.88、 32.4、58.0	雄：0.3 雌：7.9 雌雄：肝細胞肥大		雄：5.9 (mg ai/kg 体重/日) 雌：800 ppm 雄：肝細胞肥大、肝重量 増加 雌：ALP 増加、肝重量	雄：0.34 雌：7.88 雄：肝細胞肥大 雌：ALP 増加及び肝細 胞肥大	雄：0.34 雌：7.88 雄：肝細胞肥大 雌：ALP 増加及び肝細 胞肥大

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量 (mg/kg 体重/日) 1)				
			JMPR	米国	カナダ	食品安全委員会	参考資料 (農薬抄録)
					増加		
	1年間慢性毒性試験	0、10、100、400、 1,600 ppm 雄：0、0.34、3.09、 14.3、54.2 雌：0、0.40、3.83、 15.7、58.2	雄：3.1 雌：3.8  雌雄：肝細胞肥大等	/	雄：14 雌：16  雌雄：肝細胞肥大、ALP 増加等	雄：3.09 雌：3.83  雌雄：肝細胞肥大等	雄：3.09 雌：3.83  雌雄：肝細胞肥大等
ADI (cRfD)			NOAEL : 2.7 (マウス) 2.5 (ラット) 3.6 (ラット) 3.1 (イヌ) SF : 100 ADI : 0.03	NOAEL : 2.49 UF : 100 cRfD : 0.025	NOAEL : 2.5 UF : 100 ADI : 0.025	NOAEL : 2.49 SF : 100 ADI : 0.024	NOAEL : 2.49 SF : 100 ADI : 0.024
ADI (cRfD) 設定根拠資料			マウス 2年間発がん性試験 ラット 2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験 ラット 2世代繁殖試験 イヌ 1年間慢性毒性試験	ラット 2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験	ラット 2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験	ラット 2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験	ラット 2年間慢性毒性/ 発がん性併合試験

NOAEL：無毒性量 SF：安全係数 UF：不確実係数 cRfD：慢性参照用量

1) 無毒性量欄には、最小毒性量で認められた主な毒性所見等を記した。

<別紙1：代謝物/分解物等略称>

代謝物/分解物

記号	略称	化学名
M2	Hydroxy-Lactone	
M3	RH-9089	$\alpha$ -(2-ブタノン)- $\alpha$ -(4-クロロフェニル)-1 <i>H</i> 1,2,4-トリアゾール-1-プロパンニトリル
M4	RH-9090	$\alpha$ -(3-ヒドロキシブチル)- $\alpha$ -(4-クロロフェニル)-1 <i>H</i> 1,2,4-トリアゾール-1-プロパンニトリル
M5		$\delta$ -(4-クロロフェニル)- $\delta$ -シアノ-1 <i>H</i> 1,2,4-トリアゾール-1-ヘキサン酸
M6	RH-0294	
M7	Sulfate of RH-9090	
M8	Malonyl Glucoside of RH-9090	$\alpha$ -(1-マロニルグルコシルブチル)- $\alpha$ -(4-クロロフェニル)-1 <i>H</i> 1,2,4-トリアゾール-1-プロパンニトリル
M9	Glucoside of RH-9090	$\alpha$ -(1-グルコシルブチル)- $\alpha$ -(4-クロロフェニル)-1 <i>H</i> 1,2,4-トリアゾール-1-プロパンニトリル
M10	Butyric Acid Intermediate	
M11	Triazole	1 <i>H</i> -1,2,4-トリアゾール
M12	Triazole Alanine (TA)	2-アミノ-3-(1 <i>H</i> 1,2,4-トリアゾール-1-イル)プロピオン酸
M13	Triazole Acetic Acid (TAA)	3-(1 <i>H</i> 1,2,4-トリアゾール-1-イル)酢酸

原体混在物

記号	略称	化学名
①	RH-56964	(原体混在物)
②-1	RH-8812	(原体混在物)
②-2	RH-8813	(原体混在物)

<別紙 2：検査値等略称>

略称	名称
ai	有効成分量
Alb	アルブミン
ALP	アルカリホスファターゼ
ALT	アラニンアミノトランスフェラーゼ (=グルタミン酸ピルビン酸トランスアミナーゼ (GPT) )
AST	アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ (=グルタミン酸オキサロ酢酸トランスアミナーゼ (GOT) )
AUC	薬物濃度曲線下面積
BUN	血液尿素窒素
C <sub>max</sub>	最高濃度
Glu	グルコース (血糖)
GGT	γ-グルタミルトランスフェラーゼ (=γ-グルタミルトランスペプチダーゼ (γ-GTP) )
Hb	ヘモグロビン量 (血色素量)
Ht	ヘマトクリット値
LC <sub>50</sub>	半数致死濃度
LD <sub>50</sub>	半数致死量
Lym	リンパ球数
MC	メチルセルロース
MCH	平均赤血球血色素量
MCHC	平均赤血球血色素濃度
MCV	平均赤血球容積
MFO	混合機能オキシダーゼ
Neu	好中球数
PHI	最終使用から収穫までの日数
PLT	血小板数
RBC	赤血球数
Seg	分葉好中球数
T <sub>1/2</sub>	消失半減期
TAR	総投与 (処理) 放射能
T.Bil	総ビリルビン
T.Chol	総コレステロール
TG	トリグリセリド
T <sub>max</sub>	最高濃度到達時間
TRR	総残留放射能
WBC	白血球数

<別紙3：作物残留試験成績>

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					マイクロブタニル		代謝物		マイクロブタニル		代謝物	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
未成熟 ささげ (さや) 2004~ 2005年度	1	62.5 <sup>WP</sup> ×3	3	1	0.32	0.32	/	/	/	/	/	/
	3			0.11	0.10	/	/	/	/	/	/	
ふき (葉柄) 1998年度	1	93.8 <sup>EC</sup> ×3	3	7	0.35	0.35	/	/	0.310	0.306	/	/
	14			0.29	0.28	/	/	0.262	0.242	/	/	
食用ぎく (花全体) 2004年度	1	167 <sup>EC</sup> ×2	2	7	0.16	0.16	/	/	0.166	0.150	/	/
	21			0.16	0.16	/	/	0.166	0.150	/	/	
根深ねぎ (茎葉) 1985年度	1	75 <sup>WP</sup> ×3	3	7	0.38	0.36	/	/	0.408	0.375	/	/
	14			0.30	0.30	/	/	0.316	0.295	/	/	
根深ねぎ (茎葉) 1987年度	1	93.8 <sup>EC</sup> ×3	3	7	0.122	0.120	0.17	0.17	0.21	0.20	0.13	0.13
	14			0.008	0.008	<0.02	<0.02	0.02	0.02	<0.01	<0.01	
葉ねぎ (茎葉) 1985年度	1	75 <sup>WP</sup> ×3	3	21	<0.005	<0.005	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01	0.03	0.03
	7			0.142	0.137	0.12	0.11	0.13	0.12	0.08	0.07	
根深ねぎ (茎葉) 1987年度	1	93.8 <sup>EC</sup> ×3	3	14	0.091	0.086	0.09	0.09	0.07	0.07	0.04	0.04
	21			0.022	0.020	0.04	0.04	0.03	0.03	0.05	0.04	
葉ねぎ (茎葉) 1987年度	1	75 <sup>WP</sup> ×3	3	7	/	/	/	/	0.20	0.18	0.09	0.09
	14			/	/	/	/	0.03	0.03	0.07	0.06	
葉ねぎ (茎葉) 1993年度	1	93.8 <sup>EC</sup> ×3	3	21	/	/	/	/	0.02	0.02	<0.01	<0.01
	7			/	/	/	/	0.30	0.29	0.12	0.11	
根深ねぎ (茎葉) 1993年度	1	93.8 <sup>EC</sup> ×3	3	14	0.10	0.10	0.23	0.20	0.14	0.14	0.13	0.12
	21			0.06	0.06	0.35	0.34	0.04	0.04	0.19	0.19	
根深ねぎ (茎葉) 1993年度	1	169 <sup>EC</sup> ×3	3	14	/	/	/	/	0.03	0.03	0.05	0.04
	7			/	/	/	/	0.08	0.08	0.08	0.08	
にんにく (鱗茎) 1993年度	1	188 <sup>EC</sup> ×3	3	3	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	/	/	/	/
	7			<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	/	/	/	/	
わけぎ (茎葉) 2005年度	1	105 <sup>WP</sup> ×3	3	14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	/	/	/	/
	21			<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	/	/	/	/	
わけぎ (茎葉) 2005年度	1	75 <sup>WP</sup> ×3	3	3	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	/	/	/	/
	7			<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	/	/	/	/	
らっきょう (鱗茎) 2003年度	1	150 <sup>WP</sup> ×3	3	14	<0.05	<0.05	/	/	0.13	0.13	/	/
	21			<0.05	<0.05	/	/	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	
らっきょう (鱗茎) 2003年度	1	150 <sup>WP</sup> ×3	3	7	<0.05	<0.05	/	/	<0.05	<0.05	/	/
	14			<0.05	<0.05	/	/	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	
らっきょう (鱗茎) 2003年度	1	150 <sup>WP</sup> ×3	3	21	<0.05	<0.05	/	/	<0.05	<0.05	/	/
	7			<0.05	<0.05	/	/	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	
らっきょう (鱗茎) 2003年度	1	150 <sup>WP</sup> ×3	3	14	<0.05	<0.05	/	/	<0.05	<0.05	/	/
	21			<0.05	<0.05	/	/	<0.05	<0.05	<0.05	<0.05	



作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					マイクロブタニル		代謝物		マイクロブタニル		代謝物	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
あさつき (茎葉) 2005年度	1	75WP ×3	3	14	/	/	/	/	<0.05	<0.05	/	/
	21			/	/	/	/	<0.05	<0.05	/	/	
	1			14	/	/	/	/	0.33	0.33	/	/
				21	/	/	/	/	0.13	0.12	/	/
ぎぼうし (茎葉) 2004年度	1	150WP ×2	2	90	/	/	/	/	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
				119	/	/	/	/	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
	150		/	/	/	/	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1		
			1			87	/	/	/	/	<0.1	<0.1
				120	/	/	/	/	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
				150	/	/	/	/	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
トマト (果実) 2006年度	1	75WP ×4	4	1	0.05	0.05	/	/	0.08	0.08	/	/
				7	0.03	0.03	/	/	0.03	0.03	/	/
	14		0.02	0.02	/	/	0.03	0.03	/	/		
			1	0.10	0.09	/	/	0.07	0.07	/	/	
	1			7	0.04	0.04	/	/	0.04	0.04	/	/
				14	0.01	0.01	/	/	0.01	0.01	/	/
ミニトマト (果実) 2009年度	1	250~ 300EC ×3	3	1	0.31	0.30	/	/	0.28	0.27	/	/
				3	0.18	0.18	/	/	0.26	0.26	/	/
	7		0.16	0.16	/	/	0.16	0.16	/	/		
			1	0.60	0.58	/	/	0.41	0.41	/	/	
	1			3	0.51	0.50	/	/	0.39	0.38	/	/
				7	0.40	0.38	/	/	0.26	0.26	/	/
ピーマン (果実) 1992年度	1	75WP ×4	4	1	0.10	0.09	0.03	0.02	0.10	0.09	0.01	0.01
				3	0.05	0.04	0.02	0.02	0.07	0.06	<0.01	<0.01
	7		0.03	0.03	0.02	0.02	0.03	0.03	<0.01	<0.01		
			1	0.04	0.03	0.02	0.02	0.04	0.04	<0.01	<0.01	
	1			3	0.01	0.01	0.02	0.02	0.03	0.03	<0.01	<0.01
				7	0.01	0.01	0.04	0.04	0.02	0.02	<0.01	<0.01
なす (果実) 1990年度	1	32.5~ 55WP ×4	4	1	0.05	0.05	<0.01	<0.01	0.06	0.06	<0.01	<0.01
				3	0.03	0.03	<0.01	<0.01	0.03	0.03	<0.01	<0.01
	7		<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
			1	0.03	0.03	<0.01	<0.01	0.04	0.04	<0.01	<0.01	
	1			3	0.02	0.02	<0.01	<0.01	0.04	0.04	<0.01	<0.01
				7	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01
ししとう (果実) 2005年度	1	75WP ×4	4	1	/	/	/	/	0.22	0.22	/	/
				3	/	/	/	/	0.12	0.12	/	/
	7		/	/	/	/	<0.04	<0.04	/	/		
			1	0.25	0.25	/	/	0.25	0.25	/	/	
	1			3	0.21	0.21	/	/	0.21	0.21	/	/
				7	<0.04	<0.04	/	/	<0.04	<0.04	/	/
とうがらし (果実) 2005年度	1	50WP ×4	4	1	/	/	/	/	0.36	0.35	/	/
				3	/	/	/	/	0.18	0.18	/	/
	7		/	/	/	/	0.14	0.14	/	/		
			1	0.41	0.40	/	/	0.41	0.40	/	/	
	1			3	0.25	0.24	/	/	0.25	0.24	/	/
				7	0.05	0.05	/	/	0.05	0.05	/	/
きゅうり (果実) 1985年度	1	125WP ×3	3	1	0.178	0.176	0.03	0.02	0.119	0.114	0.03	0.03
				3	0.137	0.133	0.02	0.02	0.117	0.112	0.02	0.02
	7		0.096	0.092	0.03	0.02	0.044	0.044	0.01	0.01		
			1	0.254	0.242	0.03	0.02	0.226	0.224	0.03	0.03	
	1			3	0.175	0.173	0.03	0.03	0.200	0.198	0.04	0.02
				7	0.149	0.147	0.05	0.04	0.111	0.108	0.03	0.03

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					マイクロブタニル		代謝物		マイクロブタニル		代謝物	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
	1	150 <sup>WP</sup> ×3	3	1	0.033	0.032	<0.02	<0.02	0.035	0.034	<0.01	<0.01
				3	0.029	0.029	<0.02	<0.02	0.037	0.034	<0.01	<0.01
				7	0.014	0.014	<0.02	<0.02	0.012	0.011	<0.01	<0.01
	1	150 <sup>WP</sup> ×3	5	1	0.102	0.100	0.03	0.02	0.107	0.104	0.05	0.05
				3	0.094	0.093	0.03	0.03	0.066	0.066	0.04	0.04
				7	0.074	0.072	0.05	0.05	0.056	0.056	0.03	0.02
きゅうり (果実) 1985年度	1	62.5 <sup>WP</sup> ×3	3	1	0.109	0.108	0.02	0.02	0.071	0.070	0.03	0.03
				3	0.057	0.056	<0.02	<0.02	0.075	0.072	0.02	0.02
				7	0.034	0.034	<0.02	<0.02	0.031	0.030	0.03	0.02
	1	62.5 <sup>WP</sup> ×5	5	1	0.101	0.097	<0.02	<0.02	0.075	0.074	0.02	0.02
				3	0.056	0.056	<0.02	<0.02	0.075	0.072	0.01	0.01
				7	0.047	0.046	<0.02	<0.02	0.037	0.036	0.01	0.01
	1	75 <sup>WP</sup> ×3	3	1	0.013	0.013	<0.02	<0.02	0.015	0.014	<0.01	<0.01
				3	<0.005	<0.005	<0.02	<0.02	0.011	0.010	<0.01	<0.01
1	75 <sup>WP</sup> ×3	5	1	0.047	0.046	<0.02	<0.02	0.071	0.070	0.04	0.04	
			3	0.040	0.040	<0.02	<0.02	0.036	0.033	0.03	0.02	
1	37.5 <sup>WP</sup> ×3	3	1	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
			3	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
1	37.5 <sup>WP</sup> ×3	3	1	0.03	0.02	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01	
			3	0.01	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
1	50 <sup>WP</sup> ×5	5	1	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
			3	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
1	50 <sup>WP</sup> ×5	5	1	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
			3	<0.01	<0.01	<0.02	<0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
1	50 <sup>WP</sup> ×3	3	1	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
			3	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
1	50 <sup>WP</sup> ×3	3	1	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
			3	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
1	90 <sup>WP</sup> ×3	3	1	0.11	0.11	0.03	0.02	0.06	0.06	0.04	0.04	
			3	0.07	0.07	0.03	0.02	0.03	0.03	0.02	0.02	
1	150 <sup>WP</sup> ×3	3	1	0.32	0.32	0.06	0.06	0.23	0.22	0.06	0.06	
			3	0.18	0.18	0.05	0.05	0.07	0.07	0.05	0.04	
1	167 <sup>EC</sup> ×2	2	1					0.17	0.16			
			2					0.37	0.36			
1	125 <sup>EC</sup> ×2	2	1					0.16	0.16			
			2					0.50	0.50			
1	500 <sup>WP</sup> ×3	3	7	0.14	0.14	<0.02	<0.02	0.15	0.14	0.01	0.01	
			14	0.09	0.09	<0.02	<0.02	0.07	0.06	0.01	0.01	
			21	0.12	0.12	<0.02	<0.02	0.09	0.09	0.01	0.01	

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)									
					公的分析機関				社内分析機関					
					マイクロブタニル		代謝物		マイクロブタニル		代謝物			
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値		
	1		3	8	0.11	0.10	<0.02	<0.02	0.09	0.08	0.01	0.01		
				15	0.07	0.06	<0.02	<0.02	0.04	0.04	<0.01	<0.01		
				22	0.07	0.07	<0.02	<0.02	0.06	0.06	0.01	0.01		
りんご (果実) 1987年度	1	500WP ×3	3	7	/	/	/	/	0.09	0.09	<0.01	<0.01		
				14	/	/	/	/	0.09	0.08	<0.01	<0.01		
				21	/	/	/	/	0.07	0.07	0.01	0.01		
	1	1	3	7	/	/	/	/	0.01	0.01	<0.01	<0.01		
1	1	3	14	/	/	/	/	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01			
1	1	3	21	/	/	/	/	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01			
なし (果実) 1986年度	1	400WP ×3	3	14	0.03	0.02	<0.02	<0.02	0.03	0.02	<0.01	<0.01		
				21	0.03	0.03	<0.02	<0.02	0.03	0.03	<0.01	<0.01		
	1	1	3	14	0.09	0.08	<0.02	<0.02	0.14	0.13	<0.01	<0.01		
	1	1	3	21	0.14	0.14	<0.02	<0.02	0.09	0.09	0.01	0.01		
なし (果実) 1987年度	1	400WP ×3	3	14	/	/	/	/	0.08	0.08	<0.01	<0.01		
				21	/	/	/	/	0.05	0.05	<0.01	<0.01		
	1	1	3	15	/	/	/	/	0.33	0.32	0.02	0.02		
	1	1	3	22	/	/	/	/	0.35	0.34	0.04	0.04		
もも (果実) 1990年度	1	250WP ×3	4	1	0.03	0.03	0.02	0.02	0.03	0.02	<0.02	<0.02		
				3	0.04	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.03
				7	0.04	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.03
	1		1	4	1	0.21	0.20	0.06	0.06	0.13	0.12	0.08	0.07	
	1		1	4	3	0.18	0.18	0.06	0.06	0.12	0.12	0.09	0.08	
	1		1	4	7	0.10	0.10	0.06	0.06	0.12	0.12	0.09	0.09	
もも (果皮) 1990年	1	250WP ×3	4	1	1.45	1.38	0.13	0.13	1.04	1.02	0.14	0.14		
				3	1.23	1.18	0.12	0.12	1.79	1.74	0.20	0.20		
				7	1.06	1.02	0.10	0.10	0.71	0.70	0.12	0.12		
	1		1	4	1	2.88	2.77	0.21	0.20	2.80	2.74	0.22	0.20	
	1		1	4	3	4.05	4.02	0.21	0.20	3.73	3.67	0.23	0.22	
	1		1	4	7	2.21	2.16	0.20	0.20	1.40	1.39	0.17	0.16	
おうとう (果実) 1991年	1	350WP ×3	3	3	0.35	0.34	0.10	0.10	0.32	0.32	0.09	0.08		
				7	0.27	0.26	0.09	0.09	0.26	0.24	0.07	0.06		
				14	0.16	0.15	0.09	0.08	0.10	0.10	0.08	0.08		
	1	1	3	3	0.36	0.35	0.09	0.08	0.30	0.28	0.08	0.08		
	1	1	3	7	0.20	0.20	0.14	0.13	0.24	0.24	0.10	0.10		
	1	1	3	14	0.13	0.12	0.14	0.13	0.11	0.10	0.09	0.09		
いちご (果実) 1987年度	1	50WP ×3	3	1	0.17	0.17	<0.02	<0.02	0.18	0.18	<0.01	<0.01		
				3	0.11	0.11	<0.02	<0.02	0.21	0.20	<0.01	<0.01		
				7	0.07	0.07	<0.02	<0.02	0.08	0.08	<0.01	<0.01		
	1		1	3	1	0.10	0.10	<0.02	<0.02	0.15	0.15	<0.01	<0.01	
	1		1	3	3	0.12	0.12	<0.02	<0.02	0.14	0.14	<0.01	<0.01	
	1		1	3	7	0.10	0.10	<0.02	<0.02	0.06	0.06	<0.01	<0.01	
いちご (果実) 1994年度	1	75EC ×3	3	1	0.07	0.07	0.02	0.02	0.12	0.11	<0.01	<0.01		
				3	0.10	0.10	<0.01	<0.01	0.09	0.08	<0.01	<0.01		
				7	0.06	0.06	<0.01	<0.01	0.06	0.06	<0.01	<0.01		
	1	1	3	1	0.25	0.24	<0.01	<0.01	0.31	0.27	<0.01	<0.01		
	1	1	3	3	0.23	0.22	<0.01	<0.01	0.24	0.22	<0.01	<0.01		
	1	1	3	7	0.15	0.14	<0.01	<0.01	0.13	0.12	<0.01	<0.01		
かき (果実) 1988年度	1	500WP ×3	3	7	0.14	0.14	0.08	0.08	0.13	0.12	0.07	0.07		
				14	0.19	0.18	0.08	0.08	0.14	0.14	0.07	0.06		
				21	0.09	0.08	0.06	0.06	0.07	0.06	0.06	0.06		
	1	1	3	7	0.26	0.26	0.06	0.06	0.22	0.20	0.07	0.07		
	1	1	3	14	0.25	0.24	0.08	0.08	0.16	0.16	0.06	0.06		
	1	1	3	21	0.18	0.18	0.08	0.08	0.13	0.12	0.04	0.04		

作物名 (分析部位) 実施年度	試験 圃場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値 (mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					マイクロブタニル		代謝物		マイクロブタニル		代謝物	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
かき (果実) 1991年度	1	200 <sup>WP</sup> ×3	3	7	/	/	/	/	0.06	0.06	<0.01	<0.01
	14			0.05					0.05	0.01	0.01	
	1			21					0.05	0.04	<0.01	<0.01
	1		3	7					0.05	0.05	<0.01	<0.01
	1		3	14					0.04	0.04	<0.01	<0.01
	1		3	21					0.04	0.04	0.01	0.01
いちじく (果実) 1993年度	1	100 <sup>WP</sup> ×4	4	1	0.06	0.06	0.07	0.06	0.05	0.04	0.06	0.06
	3			0.02	0.02	0.05	0.05	0.02	0.02	0.06	0.06	
	1		4	7	0.01	0.01	0.03	0.02	0.01	0.01	0.04	0.04
	1		4	1	0.23	0.23	0.24	0.24	0.22	0.22	0.21	0.20
	1		4	3	0.17	0.16	0.06	0.06	0.17	0.16	0.07	0.07
	1		4	7	0.14	0.14	0.10	0.09	0.18	0.18	0.20	0.18
茶 (荒茶) 1986年	1	200 <sup>WP</sup> ×2	2	14	9.57	9.28	1.85	1.83	8.78	8.60	1.50	1.49
	21			2.53	2.48	0.55	0.54	2.41	2.36	0.67	0.66	
	1		2	14	5.72	5.52	1.75	1.69	4.84	4.78	1.49	1.42
	1		2	21	0.96	0.94	0.55	0.55	0.90	0.86	0.47	0.47
茶 (浸出液) 1986年	1		2	14	3.09	2.92	0.84	0.80	2.03	2.00	0.50	0.49
	21	0.98		0.96	0.20	0.19	0.60	0.58	0.17	0.17		
	1		2	14	2.08	2.04	0.91	0.89	1.19	1.14	0.42	0.42
	1		2	21	0.41	0.38	0.15	0.15	0.17	0.17	0.12	0.11

注) 試験には WP : 水和剤、EC : 乳剤を用いた

- ・すべてのデータが定量限界未満の場合は定量限界値の平均に<を付して記載した。
- ・代謝物 (M3、M4、M8 及び M9 の合計) の残留値はマイクロブタニルに換算して記載した。

換算係数は

$$\text{マイクロブタニル/代謝物} = 0.948$$

<参照>

- 1 食品、添加物等の規格基準（昭和 34 年厚生省告示第 370 号）の一部を改正する件（平成 17 年 11 月 29 日付、厚生労働省告示第 499 号）
- 2 食品健康影響評価について（平成 20 年 3 月 25 日付け厚生労働省食安第 0325016 号）
- 3 農薬抄録「ミクロブタニル」（殺菌剤）（平成 19 年 4 月 18 日改訂）：ダウ・ケミカル日本株式会社、一部公表
- 4 JMPR : Myclobutanil (Pesticide residues in food 1992 evaluation Part II Toxicology) (1992)
- 5 US EPA : Myclobutanil. REVISED Human Health Risk Assessment for Proposed Uses on Hops and Home Garden Fruit Trees, Nut Trees, Berries, Mint and Vegetables. (2006)
- 6 US EPA : Federal Register/Vol.70, No. 163, 49499~49507(2005)
- 7 Agriculture Canada : Decision Document Myclobutanil (1993)
- 8 食品健康影響評価の結果の通知について（平成 21 年 5 月 21 日付け府食第 498 号）
- 9 農薬抄録 ミクロブタニル（殺菌剤）（平成 22 年 7 月 12 日改訂）：ダウ・ケミカル日本株式会社、一部公表予定
- 10 作物残留試験：ダウ・ケミカル日本株式会社、未公表
- 11 食品健康影響評価について（平成 22 年 12 月 10 日付け厚生労働省食安 1210 第 2 号）